

岬龍一郎著「日本人の名著を読むー吉田松蔭『講孟余話』」致知出版社、2004年12月2日刊を読む

1. 侍とはつくるものだ、生まれるものではない

(1) 幼少の頃、松蔭は畦^{あぜ}に腰を下ろして『論語』を開き、毛利藩の藩命を受けて松蔭の家庭教師となった叔父・^{たまきぶんのしん} 玉本文之進^{そら}が誦んじていくその後を朗読する、というのが晴れた日の日課だった。ある夏の日、顔中が汗に濡れ、その汗の粘りに蠅がたかった。かゆい。松蔭は思わず手を上げてかいた。これが文之進の目に留まった。

(2) その瞬間、

「寅(寅次郎・松蔭の幼名)、奢^{おご}ったか。それでも武士の子か」

と、鉄拳が飛んだ。起き上がるとまた殴られた。なぜ殴られるか、幼い松蔭にはわからない。そこで文之進が言う。

「かゆみは私。かくことは私の満足。それを許せば、長じて人の世に出た時に私利私欲を謀る人間になる。だから殴る」

(3) 文之進は学問のほか馬術や剣術も教えていたが、そういう技術的なことよりも「侍とは何か」ということを体で覚えさせる、というのが教育の方針であった。

文之進にいわせれば、農工商の上に立ち、政治をつかさどるサムライは、もともと「公^{おおやけ}の人」である。したがって学問をするのは公のために尽くす自分をつくるためであり、その学問の途中に自分の都合で頬をかくことは私情である、というのだ。

(4) 「おまえは、ただの幼童ではない。毛利家三十七万石の山鹿流^{やまがりゆう}兵学教授を継ぐ公の身である。一日勉学を怠れば、国家(藩)の武は一日遅れることになる」というのが文之進の口癖で、

(6) すさまじいばかりのスパルタ教育であるが、武士という特権階級に立つ者の精神を鍛えるためには、それぐらいの厳しさが必要だったのであろう。こうして体中「公の人」、すなわち思考も行動もすべて世のため人のためにはどうすればよいのか、ということだけを考え続けた松蔭が誕生したのである。

(7) 顧みて、文之進のいう、「侍とはつくるものだ。生まれるものではない」という言葉は至言である。侍を人間という言葉に置き換えるとよくわかる。動物として生まれた「人」も教育によって「人間」になるのである。いかに教育するか。教育の原点はここにあるとあってよい。

2. 『講孟余話』は獄舎の講義から生まれた

(1) 吉田松蔭は、長州藩士・杉百合^{すぎゆりのすけ}之助の次男として天保元(1830)年に生まれた。五歳の時、

長州藩山鹿流兵学師範でありながら夭折した叔父の吉田大介(賢良)の養子となって、それを受け継いだ。文之進の薫陶よろしく、松蔭は十歳にして藩主の御前で講義し、十八歳で藩校明倫館の教授となって独立した。

- (2) やがて二十二歳の時江戸に上り、安積良齋、佐久間象山に師事。この象山の勧めもあって海外渡航を志し、ペリー再来(1854年・安政元年)の時密航を企てて失敗する。下田奉行所に自首して江戸送りとなり、伝馬町の牢ろうにつながれ、のち自藩の野山獄に移された。時に二十五歳。
- (3) 野山獄の生活は一年二か月。この獄では囚人たちと共に勉強したことで有名である。獄舎には松蔭を含めて十二人の囚人がいた。長期の受刑者は四十七歳という猛者もつきやもいる。そこへ突然現れた最年少の青年が「皆さんは私より年長者のようですから、このヒマな時間を使って私に何か教えてくれませんか」と言いだし、次々に先輩囚人たちを教師として教えを受けたのである。
- (4) やがて囚人たちは、松蔭がただものではないことを感じ取ると「お主ぬしにも何か教わりたい」と懇願した。松蔭は「私は諸兄のような特技というものがありませんので、大好きな孟子を講じたい」と言い、全員で『孟子』を勉強したのだった。この講義録が基となって生まれたのが『講孟余話』である。
- (5) いうまでもなく『孟子』とは儒教の教本テキストとされる「四書」(『論語』『孟子』『中庸』『大学』)の一つである。孟子の思想の特徴は性善説をもとに、尊皇を唱え、革命を肯定しているところに孔子(儒教の始祖)より過激性がある。それは「罪を憎んで人を憎まず」とか「省なみて直なおくんば、千万人といえどもわれ往かん」といった言葉に表れている。
- (6) 松蔭は、この『孟子』を教科書としながら、独自の解釈を加え、みずからの思想を築き上げていったのである。例えば、引用した文章は『講孟余話』の序説のところだが、すでにここで、たとえ孔子や孟子であろうとも、「聖賢におもねらないこと」といっているところが、松蔭の独自性が出ている。
- (7) そして松蔭は、この『孟子』を学ぶ決意を囚人たちに向かって、こう説くのである。
「世間並みの人情からいうなれば、我々は現在、囚人の身であり、再び世に出て太陽を拝するという希望はもっていない。学問を究めあって、それが完成したとしても何の役に立とうか、と考えるのが一般的な考えである。だが、仁義という考え方から見ればそうではない。人間が生まれつきもっている良心の命令、道理上、かくせねばならないという当然の道、それらを実行しよう。(略)そして、その努力によっていくらか道を知るようになったならば、それは悦ばしいことである、それで十分ではないか。孔子が“朝に道を聞けば、夕べに死すとも可なり”といったのは、このことである。諸君が以上のことに志をたてるならば、初めて孟子を学ぶ者りようけいおうということができる」(第二場・梁恵王上)
- (8) もともと『講孟余話』は最初『講孟劄記』と題されたものであった。劄とは針で刺すとの意味である。したがって劄記とは、書物を読んであたかも針で皮膚を刺すがごとく、その内容に肉薄し、針で衣を縫い取るように、文章の意味を明確にすることである。だが、松蔭はその域

まで達せず、『孟子』講義の余話でしかなかったと、後に改題して『講孟余話』とした。松蔭にはたくさんの著作があるが、最も彼の思想性を伝える書とされている。

3. 「松下村塾」での教え方

- (1) 約一年二か月の獄舎生活を経て、松蔭は藩のはからいで病気治療という理由で出獄させられ、実家へお預けの身となった。そして幽閉されていた一室で、近親弟子のために開いた寺子屋が松蔭による「松下村塾」（開設者は玉木文之進）の始まりである。これは期間にして、二十八歳から二十九歳にかけてのわずか一年強であった。教育というものが、その年月の長さではなく、先の文之進の教え同様、強烈な師の魂によっていかに影響されるか、それを如実に物語っている。
- (2) では、松蔭はどのような教育をし、何を生徒たちに教えたのか。気になるところなので、資料からその模様を二例だけ挙げる。
- (3) 「…そまつな綿服姿の目のキラキラする人が出てきて、お前は本を読むのが好きかと尋ねた。これが松蔭先生だった。(中略)いきなり『国史論』を開いて読み進み、字句の説明もなしに、わずか十歳の小僧に国家の大事を説き聞かせた。最初はおっけに取られていたが、半時あまりたつと心は先生に吸い取られてしまったようになった。家に戻ってからも、本のことより、先生のキラキラした目と、強い熱い火のような弁舌とが頭の中を往来して、まるで夢心地であった」(中島靖九郎著『吉田松蔭と松下村塾』)
- (4) 「先生の教育熱心は非常なもので、楠くすのき公が湊川で討ち死にする条は、感極まってハラハラと涙を流され、和氣清麻呂わけのきよまるや楠木正成くすのきまさしげや大石内蔵助おおいしくらのすけの事績を門弟に語るときは、自身がその人になって語った。だからその一語一語は、電気のごとく門生の肺臓に透徹し、全身の麻痺まひを禁じえなかった。」(同)
- (5) 内においては情熱の人、外においては温厚柔和、そんな松蔭の人柄がしのばれる(教え方に興味のある人は拙著『教師の哲学』(PHP 研究所)を参照されたし)。

P234 ~ 241

[コメント]

日本人の中に数多くの「先生」はいるが、吉田松蔭先生はその中でも特に印象深い先生のお一人だ。日本の教育の原点とも言える吉田松蔭先生を御紹介してくれた岬先生に感謝したい。

— 2013年3月1日 林 明夫 記 —